

1998.6

岡村昭彦の会 NO.8

人類はどこから来てどこへ行くのか

晩年の岡村昭彦は21世紀を見据えてテーマはずいぶん大きくなっていた

第13回AKIHIKOの会開催

没後13年、今年は「AKIHIKO忌」を開かれた会へという観点から「第13回AKIHIKOの会」として、三月二二日(日)、東京・神楽坂の日本出版クラブ会館で開催しました。

今年のテーマは、岡村が生きていたら、今何に関心を抱いているだろうか、どんなメッセージを届けようとしているのだろうか、と考え、「人類はなぜ宇宙へ向かっているのか」そんな主題に目を向けてみることにしました。

講師はお二人。一人は数理科学者で作家の本田

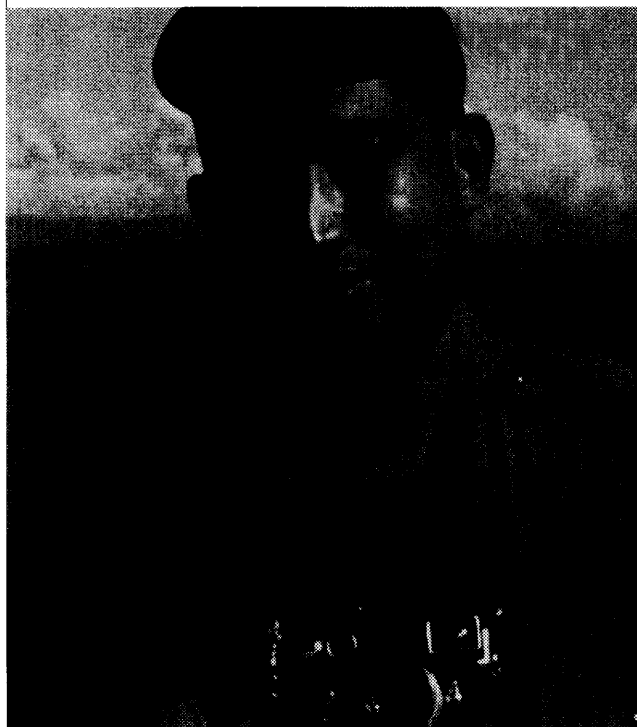
成親(しげちか)氏。もう一人は国産HIIロケット打ち上げの成功を導いた宇宙科学者で、前筑波宇宙センター所長菊山紀彦(としひこ)氏。今年の出席者は五一名。遠くは北海道函館から昭彦氏の長女の佐藤純子さん、博多の大住敏子さんは車を飛ばして駆けつけました。

当初の「開かれた会」にしようとの目論見通り、今回は子ども連れの家族の参加が目立ちました。岡村家関係の参加が例年になく少なかったのは、親族が高齢になられてきたせいもあると思います。そして今年、かつての諏訪ゼミの雨宮多喜子さんはじめ、牛山洋子さん、奥原ます子さんなど看護婦さんたちの参加が多くありました。

第二部懇親会ではAKIHIKOを肴に、楽しい会になりました。特に昭彦の東京中学時代の同級生・元木敏規氏が、「酒は飲まない」と言いながらウイスキーボトルを飲み干した話など、取って置きのエピソードを交えて楽しく語ってくれました。

第三部も恒例となりましたが、場所を変えての二次会。来年三月をめどに『シャッター以前』第3号の発刊を、若手のメンバーを中心に編集しようという話も出て、こちらのほうも大いに盛り上がりました。

お二人の講演は、雰囲気だけですが―。



宇宙論の最前線

本田成親

(ほんだ・しげちか・数理科学者・紀行作家)



宇宙論というのはなぜ難しいか、というようなお話をしようと思っていましたら、このようなタイトルになっていて、戸惑っております。一口に宇宙論と言っても、宇宙工学は総合科学ですから非常に広いわけで、五十分かそこらではとうていお話しできないわけですが、とりあえず今日は、宇宙工学の菊山先生もお出でになっておりますので、私のほうは物理学的な宇宙論の世界が、現在どのような流れになっているかということをお話します。

宇宙論、宇宙論と言いますが、物理学的・数学的な概念を持った宇宙論と宇宙科学とはかなり違っていて、これを一口に宇宙という言葉で括るのはやっかいなことです。私はもともと数学が専門で、宇宙科学を専門にしてきた人間ではありません。宇宙の空間的なことをイメージしたり、解説したりしてきました。たとえて言うならば、ものごとにはキリストの役目とパウロの役目があると思うんですね。宇宙科学の最先端の方は、最先端の創造的なキリストの仕事をして、私はそういう方々のやった仕事を数学的な観点で、分かり易く解体してお伝えする仕事をさせていただいております。

宇宙論といいますと、まずぶつかるのがアインシュタインの「相対性理論」ですが、そのキーになるところを一つだけお話しして

おきますと、「時間が縮む、空間が縮む」と言われると、もうそれだけでわけが分からなくなるのですが、この世界を測るには何か物差しを決めておかないと、概念として語りようがないんです。

この物差しに、アインシュタインは、ニュートン力学の「物差し」ではなく、光の速度こそ信頼できる「物差し」といって、「光速不変の原理」を提唱するのですね。分かり易く言うと、動いている車から、前方にボールを投げると、外から見たとき、動きにボールの速さを加えたものがボールの速度になるわけですし、後ろに投げればボールの速さを引いたものがボールの速度になるわけですね。この常識が光の速度については成り立たないと言ったのです。よく数学で言っていることを、日常言語で説明してくださいといわれるのですが、これが一番難しい問題です。

日常言語でどうにも説明がつかないので、新しい言語でやっているというのが正直なところなんです(笑)。数式にしる、みなさんいやらしいなと思いいなるでしょうが、実は言葉なのです、抽象言語なのです。

(以下略)

〔注、菊山紀彦・本田成親著『宇宙の不思議がわかる本』(三笠書房刊)に、詳しく説明されています〕

地球を守ろう

菊山紀彦

(ぎくやまとしひこ・宇宙開発事業団特任参事)

宇宙の話というのは、なんだか難しそうですねという印象を持つ方が多いのでしょけれど、昨日、私は広島に行つて幼稚園で話をしてみました。

みなさん宇宙開発というのは、どれくらい古くからやっているといますか。今から四十一年前です。一九五七年十月四日、旧ソ連は人類初の人工衛星「スプートニク1号」の打ち上げに成功しました。僕は高校二年生でした。

人間が月の上を歩いたのは二九年前、一九六九年で、そのときは勤めていたし、結婚もしていて、その後すぐ子供が産まれたので、すごく印象に残っています。その頃うちはカラーテレビじゃなくて白黒のぼやけた映像でしたが、アームストロング、オルドリンの両飛行士を見たときの感激を今でもはつきり覚えています。

宇宙開発も、今年四一歳になつて、その間に、火星にも行つたし、太陽系の端にも

行つたし、日本人では毛利さん、向井さん、土井さん、若狭さんが宇宙へ行きました。

いま私たちは何をしているのかというと、宇宙ステーションをつくらうとしていっています。七部屋のアパートのようなのをつくつて、七人の宇宙飛行士が住めるようにしようとしているのです。

それが夢とかSFではなく、すでに日本でも住居の部分をつくつていきますし、そこ

にあと五年後、二〇〇三年には七人が住むことになるのです。

それでは宇宙開発の曙の時代から、いま何が行われようとしているのか、これからスライドを使って説明していきます。

(以下スライド百枚余を使用しながら説明)

人類は地球人から宇宙人へと進化をとげる可能性に恵まれようとしています。そのため、技術革新のほかに、いま一つ、精神的な面での革新が必要だと考えられています。

人類は個体レベルでは調和のとれた生命体ですが、集団レベルになると感情や利害が衝突しあいます。地球上での感情や利害の対立は、必ずしも全人類の破滅にはつながりませんが、宇宙空間での対立は、完全な破滅を意味します。

もしも宇宙ステーションで争いが起こりそれが原因で制御機器や機密装置などに重大な故障や破損が生じたら、誰一人として助かるすべはないでしょう。

そういう事態を未然に防ぐには、誰もが現在の地球人の精神よりも、はるかに成熟した精神を持つことが必要なのです。

宇宙生命体として進化を続ける人類は、「集団レベルにおいても調和のとれた「超生命知性複合体」として存在していくべきな





事務局便り

1 「AKIHIKOの会」の活動の一つとして、毎月一回「AKIHIKOゼミ」(主宰米沢慧)を開催しています。原則として毎月第二土曜日、一三時より、JR水道橋駅・倫理研究所八階会議室にて、基調講演のあと質疑・自由懇談、そのあとビールで乾杯。年会費は三〇〇〇円です。お気軽にご参加ください。

2 このゼミの一環で「夏季特別ゼミナー」を、今年も八月八〜一〇日にかけて開催します。本年は諏訪日赤病院の米沢ゼミのメンバーとの合同ゼミナー。一日目は蓼科高原の諏訪日赤山荘、二日目は昨年もお世話になった軽井沢町千ヶ滝の岩城邸を会場に開催します。

▼今回のゲスト講師は岡村昭彦親子と交流があったチンパンジー飼育の第一人者、多摩動物公園の吉原耕一郎氏。テーマはもちろん「チンパンジー」そのほか玉木明氏、本田成親氏、そして白石忠男氏の「佐倉時代のボスAKIHIKO」等々、夏期ゼミナーならではの企画を準備中です。

▼参加希望者には詳細の案内をお送りしますので、事務局までご連絡ください。送付は七月上旬頃となります。締め切りは七月一五日。

3 岡村昭彦写真展の計画について

「福岡生と死を考える会」(代表隈崎輝輝氏)「パイオエシックスと看護を考える会」(代表二の坂保喜氏)の共催で、来年四月頃に福岡市で開催予定です。

▼もう一つは、山梨県韮崎市で保坂秀重氏が計画中です。こちらは協力者を募集しています。(保坂氏の連絡先はTEL0551・22・8315)

4 『シャッター以前』第3号の準備中
七月十一日の「AKIHIKOゼミ」で、第一回の打ち合わせを行います。是非ご参加を。

5 「AKIHIKOの会」の活動は、年一回の「AKIHIKOの会」と不定期の会報発行、毎月一回の「AKIHIKOゼミ」などです。会費、会則、会長なしで、通信費一〇〇〇円(不定期)を払った人を会員として登録して、「AKIHIKOの会」などのお知らせや会報をお送りしています。この二年間ほど通信費を払っていない人で、引き続き案内等の必要な方は通信費(切手可)をお送りください。

▼通信費の送金先は左記の通りです
口座番号「〇〇一七〇一六六一五二二三」
加入者名「岡村昭彦の会」(前回の会報では、口座番号を間違ってお迷惑をおかけしました)

「岡村昭彦の会」会報第八号

発行 東京都江戸川区西小岩五十一一―二七

戸田徹男方「岡村昭彦の会」事務局

TEL&FAX 〇三―三六五七―八三八〇